



RISING

mini

Vol.06

一次創作、二次創作をひとまとめにした増刊誌 第六号登場!!

Creat.inc



目次

ロジカリスト(猫)	……04
ネクストワールド 名のなき世界	……07
俺の同級生が魔王	……10
第二章	……10
ゆうマギコーナー	……17
ゆうなマギカ新構成版	……17
黒板厨ゆうなマギカ：結	……29
pokemon XY 第十一話	……34
【新連載】終焉と黎明の物語	……39
インフィニティ短編『ブレックファスト』	……44
【短編】私の、たったひとりの友人へ	……48
【新連載】パラドックスよ、こんにちは。 第一話	……78
次号予告	……82
あとがき	……84

「私の、たったひとりの友人へ」は二〇一四年夏に頒布された「電柱アンソロ 人は死んだら電柱になる」に掲載された同名作品を改稿したものです。

ロジカリスト（猫）

2

猫の生活も少しは慣れてきたかなあ、とか思ってきた今日このごろ、私は街を散策していたときのことだった。

急にやにやーんとしつぽが立ったのであった。

「にやにがあつたにやに」

思わず、私は猫語で呟く。

それはそれは、大層大きなものだった。

蠢いていたそれは、人のようでもあつて神様のようでもあつて妖怪のようでもあつてそれ以外でもなかった。なんと表現すればいいのか、その語彙が私には解らなかった。

語彙が低いというのも考えものだね。今度から辞書を読み歩くことにしよう。え、そういうことじゃない、って？ そうだね、確かに違うね。今から話を始めることは、なんといかひどく冷たいようで、えらい悲しい話になると思う。私は予知能力だなんてものはないけれど、それをそうと感ぜられるほどには私は人生経験が豊富だと自負している。

猫というのは、なんとも面白い特性を持った生き物であることは、私が一番知っている。

る。例えば、『バター猫のパラドックス』だ。バターを塗ったトーストを落とすと、必ずバターを塗った面を下にして落ちる。選択的重力の法則とかいう小難しいことはこらで置いてくとして、まあ、そうなる。次に、自明であるけれど、猫は必ず背中を下にして落ちることはない。これから考えて、バタートーストをくりつけた猫を落とすと、どの方向を下にして落ちるのだろうか——というのが『バター猫のパラドックス』である。

バター猫はどうでもいいけれど、バター猫というののもどうかと思う。バタートーストならばいいのに、バター猫とか書かれたらそれはバターを全身に塗りたい猫なのかと疑う。そんなことは実際にはありえないけれど。

「……今、目の前に立っているものはいったいなんだというのだろう。これが『妖怪』というか、異界の生き物だつて言うのかな」

思わず声を出してしまったけれど、それが何なのかは私にだつて知りえない。それがなんであれ、私は二つの選択を迫られたわけだ。

一つ、ここから一目散で逃げること。

二つ、なんとかしてその生き物を退くこと。

できることなら後者ではなく前者にしておきたいが、そうもいかない。もし、この異界の生き物とやらの足がマツハ10とかだったら、一瞬にして私は捕まる。何をされるかたまったものではない。

だとすれば、

することは何にするか。

自明だ。

「うおおおおおおおおおおおおお！」

心もとないけれど、叫ぶ。そして、手に持っていたハンドバッグを掲げ、私はそれに向かって走り出した。

ネクストワールド 名のなき世界3

第二章 第一話

イクスとイグレックはパレイアと呼ばれる港町へ足を運んだ。

パレイアという町はとても栄えている。この町が栄えているのは、『港町』という点が欠かせないだろう。この町を語る上で欠かせない。

「……ここがパレイア……」

「自分の村以外は来たことがない、ということですか？」

イグレックの言葉にイクスは頷く。

イクスは生まれてこのかた、自分の住んでいた村でしか過ごしたことがない。彼の生活範囲がその範囲にしか含まれていないのだから、寧ろそれは当然のことと言えるだろう。

それでも。

彼がここにやってきたことに、イグレックは小さく溜息を吐く。

「さて……、あなたはこれから船に乗り込み新しい大陸へと足を踏み入れることになり
ます」

「大陸？」

『安定化装置』が鎮座する大陸はここから遠い場所にある。そしてそれを覆い隠すように外大陸が広がっている。アサメ村はその外大陸よりもさらに離れた小島にある。そしてその小島唯一の港町がパレイアという町だった。

「パレイア……、この町はあくまでも通過点だというのかい？」

イグレッツクは頷く。

「ええ、あくまでも通過点です。これからあなたを『本部』へと連れて行くためには、ここを通らねばなりません。私の魔法を使えばどうということはないのですが……」

「魔法を使ってここまでやってきたの？」

「ええ」

イグレッツクの言葉にイクスは目を輝かせる。

「すごい、すごい！ 魔法でここまでやってきたんだ！」

「ええ、そうですよ。でもあまり周りの人に知られたくはないのですけどね」

「なんで？」

「それは……」

「おい嬢ちゃん。今、『魔法』って言ったかい？」

その言葉を聞いて、イグレッツクは無意識に身体を強ばらせた。

そこに立っていたのは屈強な男だった。それも一人ではない、二人、いや、三人以上いる。

「だとしたら……どうだというのですか」

「いやあ……あんたもここに来て『知らない』と言うわけでもないだろ？ この町……パレイアでは『ある仕事』が流行っているってことを、よ！」

ハハハ、と笑う屈強な男。

イグレックは舌打ちして、イクスの手を引つ張る。

「行きましょう、イクス。ここで足止めされる筋合いは毛頭ありません」

「おおつ？ 行くのかい？ 大人の言葉を無視して行ってしまうのかいい？」

そう言つて屈強な男のひとりにはイグレックの進路を足止めする。

男のひとりがイグレックの顔を見る。

まるで鑑定するように。

「……ほう、いい顔じゃねえか。これなら一万、いや……五万はくだらねえな」

「親分、こっちの男はどうです？」

「うーん、そっちは微妙だが、子供は高く売れる。ついでに持って行っても意味ないだろ。どうせこんなところでふらついているんだ。ろくな親なんて居ねえだろうしよ」

「そりゃそうだ！」

ガツハツハ、と笑う一同。

そして彼らは抵抗も虚しく、男たちに連れられて、どこかへと消えていった。

俺の同級生が魔王

第二章 前編

夏という暑くてじめじめしていやーな季節が終わったと思えば、台風がまもなく近づいてきますという天気予報士の言うとおりに空が暗くなっていく。こんな日があると思えばまた夏みたいに空つ風が吹いて猛暑日になる日もある。一言で言えば9月というのは不安定な時期なのだ。

いや、それは夏だけにいえるのかもしれない。面倒くさがりな神様なのか。最近立秋を迎えて二ヶ月近く立っても気温が30度を下回る日は少ない。所詮人間が勝手に定めた日付、といってしまうえばそれまでだが、季節が変わるならとつとと変わってほしいものである。

こんな愚痴をはなしている間にも、どんどん文字数は嵩んでいく。そろそろこのへんで無駄話を打ち切らないと、飽きられそうなきもするので、ようやく本題に入ろうかな、と思う。

俺が高校に入学してからあと一ヶ月で半年がとうとうとしていた。俺の学校は二期制なので、前期が終わって後期に突入していた。うちの学校は非常に変わっていて、通常高校のような夏休み、まあ普通ならば七月中旬から九月までといったところか、が終わって、その後に『秋休み』が待っている。なんと休みが多い学校か。ただ俺は陸上競技部がないと判明してからなんとなく暗くなっていた。

いや、もっとというならその後からだな。

俺の後ろに座って、下敷きを団扇代わりにして、セーラー服のリボンを外して、髪は少しボサボサの彼女こそが、この俺の暗い高校生活の元凶であるのだ。

彼女の名前は直接は聞かなかったが、これまでの授業でだいたいは聞いていた。

高峰真琴。

それが彼女の名前だった。

こう聞くと至って普通の、いやむしろかわいい、女の子なんだが、ちょっと……ちょっとだけ……違うんだ。普通の子と、なにか、ね。

それはな。まあ、見ていれば分かるよ「おい暑いぞ、つーさん。僕しもべならなんとかして風を吹き起こさせろ」

ほら、始まった。

「だから俺は下僕になってねえし。仮にそんな能力あったらおまえじゃなくて自分に使っているわ」

一応いっておくが、俺の渾名は『つーさん』である。本名からとったもので、妹が面白がって呼び始めたのを最初については家族・親戚全員が俺のことをつーさんと呼ぶようになった。つーさんとかやめてくれ。年上に『さん』付けで呼ばれるっていろんな誤解をまねくだろうが。とか思いながらも今では普通になれている。「もういいや」的な感じで。

「おい、なにぼうつとしていろの?! 放課後、会議あるからきなさいよ!!」

……何が会議か。ただの『厨二病仲間探し』じゃないか。まあ、仕方ないのでついていくのだが。ついていかないとあとで痛いおしおきがまっている。下手したら屋上から突き落とされかねない。

こんな日常。毎日かならずなんかよくわけのわからんのが舞い込んでくる。退屈しなだけでがマシではある。

本当はこんな高校生活を送るつもりはなかった。陸上競技部に入って、汗を流して、大会に出て、それなりにいい記録を出して……的なかんじで三年間をすごそうとおもっていた。しかし、陸上競技部がなかった。そしてあいつとであった。強制的に魔王『ごっこ』をやらされる羽目となったのだ。え? 何も言っていないのにいきなりここに飛ぶな、って? 仕方ないだろう。簡単に言えばあいつは魔王だ。目からビームも出れば、ビッグバンアタックもでるのだろう。まあ、すべて俺の妄想にすぎないことだがな。

そんなこんなで放課後になった。放課後って、みんなが自由に使える時間のはずだよ

な？ 家に帰ってもよし、部活をしてもよし、勉強していてもよし。昼寝していてもいいはずだ。

だがしかし、あいつにはそれが通用しない。適応外だ。適応してほしいが、あいつにはそんな知識ないだろう。なぜだ。なぜあいつのためにおれの貴重な放課後タイムが奪われねばならない。おれははやくダーズリンを飲まないと死んでしまうのだ、とかそんなマンガにありそうな嘘でもついてみようか。意外とあいつは、ころっと引っかかりそうだな。あ、紅茶は好きだぞ。ちなみに一番好きなのはマックのアイスレモンティーだ。そんな無駄話をしているうちに、俺は待ち合わせ場所兼俺とあいつの集会所である図書室にやってきた。うちの図書室は普通の図書室とことなり、ふつうにしゃべってオツケーというわけわからん制度を持っている。しかし、俺らの集会所は正式にはここではない。

図書室のカウンターにかけられた名札をひっくり返し、腕章をつける。この腕章もあいつお手製で緑色に白いラインが一線引かれている。おれはジャツジメントじゃねーぞ。中にはいると「遅いわねー」とあいつの声が聞こえてくる。ほんと、あの性格さえなければかわいいんだがな。というかおまえも同じクラスだろ。おまえの方が早すぎだと問いつめたら、

「早引きよ。あんな授業つままないもん」
非常に腹立つ一言だ。

そして、俺は違和感に気づいた。俺たちはいつも、図書室準備室という部屋にいる。そこは埃を被った蔵書などがたくさんあり、たまにこの蔵書を借りる人がいる訳なのだが、実質あまりいないので、ここを使うことはあまりない。そこにあいつは目を付けたりらしく、ある条件を提示して、ここを使わせてくれ、と教頭に頼んだそうだ。行動力の高いことだ。

その条件とは「常時図書委員」になること。というわけで半ば強引におれも図書委員になったわけだ。

じゃなくて、話を思いつきりずらしてしまったではないか。真琴はいま、自分が持ってきたと言いつ張るイスに座っている。そのときはあいつは何も飲まない。飲むとしても購買で買ったであろうジュースをちびちびと飲むだけだ。

なのに、今日はまたどこからか持ってきたかわからない陶器製のティーカップが机の上に乗っていた。しかも、イスが一つ増えていた。

「あれ？」

俺は思わず呟いて、あたりを見渡す。

「どうした？」

真琴の声がすぐにかえる。

「いや、イスが増えているのを見てな……」

「ああ」

真琴は無機質に答える。

「新しく図書委員になった子。お茶汲みしてもらってる」

「どうやら今日の調子はいいらしい。真琴の調子がひどいときなんか常に怒っていて、話すのもきつい状態なのだ。」

「……もしかして、強制？」

「何言ってるのよ。普通に帰ろうとしていたところを『丁寧』ここまでお連れしただけよ？」

「おまえそれを強制って言っただよ!!」

「なによー。ムカムカして。こつちまでイライラしてくる」

おっと、これはまずい。おれは地雷をギリギリ踏みそうなところまで来ていたようだ。

俺は急いで地雷探知犬ばりのスピードで地雷原から逃げるために、いつもの席——真琴の隣に座ることにした。

「んで？ 呼んだ理由ってなんだ？ また『探索』か？」

「ええ！ 当たり前じゃない！ これが図書委員会の日課ってものでしょう？」

いや、図書委員会って外歩くんかい。活動内容に全く書いてないだろそんなこと。と心の中で突っ込んでおいて、

「じゃあ、行くわよ!!」

今日のテンションはいい方らしい。ウキウキとエアロスシスの『I Don't Want To

Miss A [Thing] を口ずさみながら、外へ出ていった。

『RISING mini』第7号につづく。

そのころ、一人の少女が通路を歩いていた。彼女の名前は御行篝といい、ある一人の少女を救うために命を懸けて戦っている。

そんな彼女は今、地下のほの暗い廊下を歩いていた。

「……ねえ、まだ続くの？」

前に歩いていたのは矢代智行と自らを名乗っていた黒板厨だ。だが、篝自身まだ彼を信用出来ていない。

彼は信用に足る人物だろうか？ 智行に対する不安が沸々と浮かび上がる。そもそも篝はこの場所の設計図（または地図）なんて脳内に入れてないから、どこが何の部屋だか把握すら出来ないのだが。

「……ここが清白優菜の置かれている場所だ」

不意に立ち止まったので、篝は前をむいた。

そこには大きなガラス管が設置されていた。ガラス管の中には薄緑の液体で満たされていて——そして——その中には。

「……優菜……！」

清白優菜の姿があった。

優菜はなにかに縛られているわけでもなく、ただ浮いていた。水の中に浮いていた。

「……死んでないわよね」

「まさか。黒板厨のカミサマともいえる存在をそう簡単に殺すわけがない」 矢代智行は少しオーバーに言っていたが、篝は彼が嘘をついてない、と思えた。

「……まあいい。とりあえずここが彼女の場所だ。さあ、話すなら話せばいい。ただし、彼女は今仮死に近い状態にあるけどね」

その言葉を聞き、篝は振り返った。

「さつき、十年前にインパクトが起きかけたって言っただろ。それで清白優菜の精神……黒板消しは封印されてしまったんだ」

ちよつと待って、と彼女は言った。

「どうしたんだい。そんな浮かない顔をして」

その表情からして智行は篝の疑問を理解していないようだった。

彼女は頭の中で考える。——今、彼はなんと言った？

確かに今、智行は清白優菜の精神は『黒板消し』だと言った。つまり……彼女も黒板厨になってしまっていたのだろうか？

それを知る術を、篝は知らない。だが彼女は——優菜が黒板厨にならないように今までやしーろの勧誘を突っ放していたはずだった。だが、今の彼女は黒板厨になっている。

——一体いつ契約したのだろうか？

「知りたいかい、御行篝」

そう呟いたのは、矢代謙吾だった。矢代謙吾は初めて篝に会った時と同じ表情をして、話を続けた。

「……清白優菜の黒板消しなら安心しなよ。すでに『シャルロッテ』とともに地球に帰還している。君が考えることでもない」

「私が言いたいのはそのような問題じゃない」
篝は矢代謙吾の方を振り返って、答えた。

「私が言いたいの……どうして、彼女も黒板厨になっているのか、ということよ」
「親殺しのパラドックスって知っているかい？」

矢代謙吾は彼女の問いに質問で答えた。

親殺しのパラドックスとは、SF作家ルネ・バルシャベルが彼の執筆した作品上で初めて提起したもの（正確にこのシチュエーションで提起されたはじめてであり、この形式はそれ以前にも考えられていた）で、英語では『祖父のパラドックス』とも呼ばれる。例えば、ある人が時間を遡って、血の繋がった祖父が祖母に出会う前に殺してしまったらどうなるか……というものである。

その場合、その時間旅行者の両親のどちらかが生まれてこないことになり、結果として本人も生まれてこないことになる。従って、存在しない者が時間を遡る旅行もできな

いし、祖父を殺すこともできないから祖父は死なずに祖母と出会う。すると、やはり彼はタイムトラベルをして祖父を殺す……。このように堂々巡りになるという論理的パラドックスである。

「……それで、その親殺しのパラソックスがどうかした？」

「パラドックスだよ、御行篝」

矢代謙吾は苦笑した。

「人の間違いを笑う程、あなたも余裕なのね」

「いやあ、まさか君がそんな間違いをするとはね……」

「話を簡単にまとめなさい。さもないと撃つ」

そう言つて御行篝は彼女のお気に入りのお銃——ワルサーPKKを構えた。もともと中型拳銃用に開発されたPKKを小型化したもので、女性でも扱いやすい小型拳銃である。

「おいおい、その銃で僕と戦うのか？」

その言葉に篝は測り知れない恐怖を、一瞬だが覚えた。

「……何を言っているの」

「あんただって解っているんじゃないか」

矢代謙吾の口調は先程とは違い乱暴なものとなっていた。

「インキュベーターは普通の攻撃では殺せない。……殺すなら『核』を潰さなきゃね」

「核？」

「君には言ってもいいだろう。どうせ、君には壊すこともできないし」

矢代謙吾は不敵な笑みを零し、呟いた。

「……『コンダクターキューブ』というものがあってね。インキュベーターの製造装置とでも言うべきかな。そこにボクらの核がある」

矢代謙吾は自らの胸をトントンと叩いた。

「……コンダクターキューブ？」

「そう。そしてそれは黒板厨には壊すことはできないのさ。何故なら黒板厨より上の次元にあるからね。……もしかしたら概念と化した清白優菜とか神名瑞穂ならば可能かもしれないけど」

矢代謙吾はせせら笑う。それとは対照的に篝は表情一つ変えることもなかった。

「……ならば、あなたの方の次元を下げても」

「君ならやりかねないね。……ま、どっちにしろあと一週間だ」

「？」

「現御神計画……簡単に言うと、清白優菜をカミ……概念化させるまでのタイムリミットだよ。それが終われば君がどう足掻いても次の世界が再構築される。今度は君の記憶も消してあげよう。そのほうが辛くないだろ？」

「次の”世界……。やはりループしていたというの……？」

「ああ。今は確か……一万二千五百六十二回目かな。あんまりループしすぎちゃうもん

で、ほかの世界とちよつとした切欠でくつついちやうこともあるんだよ」

矢代謙吾はくつくつと笑い、踵を返しゆっくりと去っていった。

それを篝はただ見つめるだけだった。

02

清白優菜は自分の部屋のベッドで目を覚ました。

「なんだかひどい夢を見ていたような……」

しかし、それをすぐに忘れることとした。なぜならば。

「うわーっ！ 時計がもうこんな時間……！ お母さんなんで起こして来れなかったのー

っ！！

優菜は慌てて、学校の用意を始める。

「今日は英語あったっけ……ああ、数学が今日演習当たってるんだ。やらなくちゃ……！」

彼女はこの屈沢市の中学校に通っている、普通の女の子だ。女の子に過ぎないのだ。

「いってきまーすー！」

パンをくわえて、優菜は外へ飛び出した。

道の途中で、ひとりの少女と出会った。

「なんだよ優菜、今日もまた遅刻か？」

彼女の名前は蓮野陽香といい、優菜の親友である。優菜とは幼稚園の頃からの親友らしく、未だに一番話す人間は彼女と言うくらいである。

「今日は数学の演習当たっちゃってるの忘れてたよ」

「数学の演習？ ……あつ、私も当たってる……。なんだったつけ……」

陽香はうーんと頭をひねって考え始めた。しかし、時間はなかった。

「まあ、いいや。あの先生結構手抜きだし……」

「でも運が悪かったらとことん突っ込まれるよ？」

「それがあるんだよなー！」

あつはつは、と陽香は笑って優菜の肩を叩いた。

「痛いよ陽香ちゃん……」

「あつ、ごめんごめん！ えーと……。で、どこだったつけ？」

「数学の演習？ えーと、二次方程式の解法？」

「あー、そこか！ ならなんとかなるっしょ！」

ふたりが学校に入って、並んで歩いていた。

いつもの、光景だった。

しかし。

「……ねえ、優菜。なんか変じゃない？」

「どういふこと？」

優菜はそれに気付かなかったが、陽香はその異変に気づいていた。

まず、人が居ない。

次に、恐ろしいくらい静かであること。この世界はいくらか音があってもおかしくはないはずである。それなのに、音が無い。音がない世界とは、酷く気持ち悪く、当たり前のように静かである。

「……どうということ」

「そっか」

陽香が驚いていたのとは対照的に、優菜は静かにそう呟いた。

一步踏み出し、さらに話を続ける。

「——ここは、ただの張りぼての世界なんだね」

一步、さらに一步進む。

部屋が、廊下が、場面が、硝子のようにヒビが入る。

「——私は、まだあの試験管の中なんだよ。そうでしょ、やしーろ？」

「やれやれ、気付いていたのかい」

ヒビ割れた場所には、闇が広がっていた。

そこから、矢代健吾の姿が見えた。

「何時から気づいていた？」

「——確信に変わったのは、今かな。だけど、それまでは曖昧だったよ。もしかして本

当に戻ったのかな……って」

「ふむ。もう少し仮想現実のクオリティを上げるべきだったかな。悔しいよ」
ヒビ割れていく。ヒビ割れていく。

最終的に——『学校』だった空間は破壊された。

03

その頃、『Raffle』基地。

突然だった。

ゴッン と地面全体を揺らす衝撃が走った。

「……襲撃ッ!」

篝は急いで衝撃のあった現場へと向かった。

*

現場では、寺島鈴菜が襲撃を行っていた。

「テイロ・ファイナーレッツ」

ドゴンツと壁に銃弾を撃ち放った。

銃弾を壁に当てた衝撃で、壁の一部が打ち砕かれる。

それから、二人の黒板厨が入っていった。

千屋芹那と、大蔵杏。

二人の黒板厨はそれぞれの武器を構えて、潜入した。

杏は槍、芹那は剣だ。

杏と芹那はそれぞれの武器を携えて、奥へと進んでいった。

*

そのころ、篝。

矢代謙吾との会話。

「……ねえ、すこし話をしないかい？」

「こんな時に？」

「そう、こんな時だからこそだ」矢代謙吾はせせら笑う。

それを箸は不貞腐れたような顔で眺めた。

「君は、今、変わろうとしていたね」

「変わる？」

「そうさ。清白優菜を救おうと、変わろうと、した。でも、実際には結果は変わらなかった。……いや、もっとひどい方向に進んでいるね」

「そう……ね」

「変わろうと思う気持ちは、自殺である。ってどつかの人も言っていたね」

「……それが、どうかしたの」

「それが、今の君だよ。君は自殺しようとしているんだよ。君は自殺して、新しい自分で、清白優菜を救おうとしたんだ。果たして、それを清白優菜は望むだろうか？」

「……わからないわ」

その言葉に、矢代謙吾は肩を竦めた。「まあ、君はよく考えたほうがいいよ。だって、君は」

——現御神計画の重要なピースだからね。

そう言つて、矢代謙吾は消えた。

おわり。

黒板厨ゆうなマジカ…結

07

人工生命には、思想はあつても感情など抱かない。

そんなことを研究した科学者がいた。

結論から言つて、人工生命に感情を付与することは簡単だった。

しかし、人工生命を軍事利用しようとした政府からその研究は差し押さえられ、その科学者は死んだ。

めでたしめでたし。

08

百合の世界は、夏未が想像する以上に呆気なかった。

戦いの途中経過がたった一言で表せるほどに、呆気ないものだった。

その一言を言うなら——『自らの力に耐え切れなかった』ということ。

百合の世界は恐ろしい力を持っていた。おそらくはワルプルギスの夜やユグドラシル

なんて目じゃないほどに。

しかし、あいにく彼女は——否、その黒板世界は、それに耐え切れるほどの身体を有していなかった。

世界が、躯体が、崩壊を開始する。

それを見て、夏未はぼつり呟いた。

「——なんだ、呆気ないオチだな」

崩壊した躯体が雨のごとく、地面へと降り注ぐ。

それを矢代知行はただ眺めていた。

「……泣いているのかい、比嘉倉夏未」

知行が訊ねると、夏未は顔を上に上げる。

そして、呟いた。

「いいや、埃が目に入っただけだ」

そう言って彼女は声を殺して——泣いた。

「……ああ、そうかい。連絡ご苦労さま」

千屋芹那と矢代健吾の膠着状態が長く続いていたが、芹那の電話、そしてその終了

後に発した一言で状態は大きく動いた。

「御行篝が死んだそうだ」

それに——驚くことはしなかった。

矢代健吾は凡てを知っていた。

だが、それを御行篝には一切言わなかった。

彼女が、優柔のために生きていることを、黒板厨になっていることを知っているから。

彼女がそれを知れば、確実に黒板世界へと昇華していくと——思っていたから。それは、黒板世界になるときのエネルギーを得るためにいるインキュベーターにとつては職務放棄ともいえることだった。

しかし、彼はそれを行った。それが自分自身の存在意義を消し去ることになろうとも。

だが、今彼は悔いていた。

だが、彼は知っていたはずである。

遅かれ早かれ、御行篝は心の柵が解き放たれ——黒板世界になりうるということを。

「その感触だと、何か知っているようだね」

芹那はそう言ってナイフに力を込める。

「まあ、もう面倒くさくなってしまうから——これで終わりにしてしまっただけれど」

「それは違うね」

その発言は、芹那がナイフにさらに力を込め、健吾の首を搔っ切ろうとしたときの発

言だった。そしてそれは、第三者からの発言だと理解するまでに少々の時間を要した。

それは凡てが黒かった。

そして、一瞬でそれが誰だか理解した。

『闇の垂霊』……』

「久しぶりだね。まったくもって久しぶりだ」

しかし、闇はそういう素振りを見せずに、

「君は知りすぎてしまったね。どれくらいループしてしまったのか知らないが……それくらい知っているならば、ここまでたどり着いたのだし、君に質問権を差し上げよう。

一つだけ、どんな質問でも答えてあげよう」

闇は、小さく微笑んだ。

芹那は、瞬間的に問うた。

「清白優菜は、生きているの？」

その間に、闇は首を振った。

「ああ、そんなつまらない問いとは思わなかったよ。ああ、清白優菜は生きているよ。

ただし、この世界ではないがね。生きていることには間違いないね。彼女には、『この世界が終わっても』エネルギーを搾取し続けることが出来る、永遠の物質だから」

「物質、ね……」

「さて、もう終わりかな？ そろそろ僕も終わりにしたいんだけど」

これ以上の抵抗は不可能だ——芹那は判断して、小さく頷く。

「それじゃ、さよなら」

そう言つて、闇は右手を天へ高く掲げて——

——それを振り翳した。

Pokémon XY

第十一話

「プラターヌ博士、私はこれからホウエンへと向かってみようと考えています」
とこころ変わって、プラターヌ博士の研究所にて二人の男が会話をしていた。

ひとりはホロキヤスターを開発したフラダリ。

そしてもうひとりはポケモン研究の権威、プラターヌだ。

「……どうして唐突にそんなことを言い出したのです、フラダリ氏」

「ホウエン地方というのは遠い場所であることは私も知っております。ですが、ホウエン地方で新たなメガシンカが発見されたと聞くではないですか。私とて学究の徒。すぐにその場に向かい、確認したいのです」

「なるほど。……それは高尚な理由です。私もカロスのことが忙しくなければすぐにそちらへ出向きたいものですが……」

「ならばこうしましょう。私が映像を録画してきます。それを、逐一ホロキヤスターを通してお見せするというのは」

「さすがフラダリ氏！」

プラターヌは二人分のコーヒーを持ってきてテーブルへ置いた。

「おや、いつもの二人はいらっしやらないのですか？」

フラダリの言葉にプラターヌは肩を竦める。

「ジーナとデクシオですか。彼らは今、イクスクンたちにパーツを渡しに行きましたよ。漸く新しいカロス凶鑑のバージョンアップが出来ましたからね。本当ならば私が直接会いに行つて説明したいところですが、そうも言つていただけません。まだまだ世界は知らないものに満ち溢れています。だからこそ、調べなくてはならないのです」

「成る程。流星はプラターヌ博士。関心いたします」
フラダリは首肯。

プラターヌは腰掛け、再びフラダリに訊ねる。

「それで、出発はいつごろを？」

「なるべく早く出向きたいと考えております。予定では明後日でしょうか」

「明後日……ですか。大変なことになるとは思いますが、お気を付けて」

「ええ。ありがとうございます」

そしてフラダリとプラターヌの会話は終了し、彼らは別れた。



ところ変わって、ここはコウジンタウン……ではなく、地繋ぎの洞穴を抜けた道路である。そこは高台になっていて、そこから景色を望むことができる。

「あそこに見えるのがショウヨウシティか。そしてそこに居るのはジムリーダー……」
「ああ、くそつ。あそこまで見えているのに行けることが出来ないなんて。ここから崖を降りようなんて……まあ出来ないよな」

「そりゃそうですよ、イクス。危険です」

そうイクスに注意したのはトロバだった。

トロバは小さく溜息を吐いて、前を見る。そこに立っていたのは、彼らもよく知る人間だった。

「あ……あなたたちは」

「お待ちしておりました、凶鑑所有者たち」

そこに立っていたのはジーナとデクシオだった。

デクシオはあるものを持っていた。それは小さなケースだった。

「いったい、どうしたのですか？」

訊ねたのはイグレックだった。

その言葉にジーナは答える。

「プラターヌ博士が新しいアップデートをしたい、と言っていたの。だけれど、あなたたちは旅を続けているでしょう？ とはいえわざわざ研究所まで戻ってもらうのも忍びない。だから、私たちに頼まれたの。アップデートパッチを、持っていくように」

「ここにやってくるのを待っていた、ということですか？」

ジーナはそれに首肯する。

「そしてあなたたちにこのパッチ……が入ったチップを渡します。そしてそれを凶鑑に入れることで自動的にパッチが適用され、バージョンアップが終了する……プラターヌ博士はそう言っていました」

「つまり、」

トロバは訊ねる。

「それをすれば今まで見たことのなかったポケモンが、きちんと記録されるようになるということですか？」

「ええ。そうだと思います」

そしてイクスたちの凶鑑にアップデートパッチが入ったチップが入れられる。入れた瞬間凶鑑は起動し、『パッチを適用しています』という無機質な文字が画面上に浮かび上がるのを見た。それを見て凶鑑が正常に反応していることを知った。

パッチの適用はものの五分で終わってしまった。

「それでは、私たちはこれで。良い旅を」

それだけを済ませて、ジーナとデクシオはイクスたちが出てきた地繋ぎの洞穴へと入っていった。

イクスたちは凶鑑を見る。そこにはこう書かれていた。
——コーストカロス凶鑑と。

『RISING mini』第7号に続く。

終焉と黎明の物語

(共通 第一話)

カロス地方から遠く離れたホウエン地方。

その田舎町、ミシロタウン。

その田舎町にはポケモン博士の権威であるオダマキ博士の研究所が存在する。ポケモントレーナーとなる人間はここで図鑑をもらい、旅に出る。

そして今、二人の少年少女も——図鑑を手に入れ、旅立とうとしていた。

「よく来たね。オメガにアルファ！」

オダマキ博士はそう言って微笑む。

彼の前に立っているのは、二人の少年少女であった。

少年の名前はオメガ、少女の名前をアルファという。二人共、この町で生まれ育った幼馴染だ。十一歳になった彼らは、ポケモンをもらい、図鑑を手に入れることができるのだ。

オダマキ博士はそれを見て、うんうんと頷くと、カバンから三つのモンスターボールを差し出した。

「ここにいるのは、君たちが見たことのないポケモンだ。さあ、この中から君の欲しい

ポケモンを一匹あげよう！」

その言葉を聞いてアルファとオメガの表情が和らいだ。当然だろう。彼らは凶鑑を手に入れるため、ずっと楽しみにしてきた。そして今、今日そのときがやってきたのだ。オメガはポケモンを眺めていく。アチャモにミズゴロウにキモリ。ポケモンの名前と種類は既に本などで学習済みである。

「どれにしようかなあ……」

オメガはいろいろと容姿を確認しながら、どれにしようか考えていた。対してアルファ。

「オメガ、まだ決まらないの？ 私はもうとっくに決めているよ！」

「な、なんだってー！」

指をちゅちゅちと振るアルファに驚くオメガ。彼女は昔から行動が早いことは彼も知っていたが、まさかこれほどまでに早く決めるとは彼も考えていなかった。

「私が選ぶポケモンは……これ！」

そう言ってアルファは一匹のポケモンが入ったモンスターボールを指差した。

そこに入っていたのは――。

「……アチャモ？」

「ほほう、アチャモか。可愛い容姿だが、侮ってはいけない。炎ポケモンだからね。ちなみに抱きしめるととても温かい」

オレンジ色の身体をしたそのポケモン——アチャモはその説明が終わった直後に、アルファを見て小さく鳴いた。

すぐさまアチャモをモンスターボールから出して、抱きしめる。アチャモの身体はオダマキ博士の言ったとおりとても温かい。

「それじゃ僕はこれだ！」

そう言つてオメガが取り出したのは、ミズゴロウの入ったモンスターボール。

「何よ、オメガ。私のポケモンを見て相性を考えたでしょう？　そしてその結果、炎に弱いのは水だから、そういうことにしたわけ？」

「そういうつもりではないよ。断固としてそれだけは僕のプライドにかけて宣言しておく」

「ふうん……」

アルファはまだオメガを不審がっているが、それも一瞬。

理由は簡単。オダマキ博士が差し出した、あるものだ。

「これだけで満足してもらつてはこまるよ、オメガとアルファ。僕は君たちの類希なるセンスに見惚れて、これを頼んでいるんだ」

手渡したものは——ポケモン図鑑だった。

「これ……ポケモン図鑑？」

オダマキ博士は頷く。

オダマキ博士がオメガとアルファにやってほしいこと。それは簡単だった。ハウエン地方におけるポケモン図鑑の完成、だ。ポケモン図鑑の完成自体はもう随分と前に終了しているのだが、二年前に発見された『メガシンカ』という概念がポケモン学会を大いに沸かせた。

はじめはカロスだけでしか確認されていなかったメガシンカも、今はハウエンでも観測されている。それどころかメガシンカの根源はハウエンにある、と言う学者もいるくらいなのだ。

そして、そんなハウエン地方でポケモンの研究をしている人間からして、それは絶対にやらなくてはならないこと——だと思っていた。だからこそ、それを達成すべきだと考えていた。ポケモン研究の発展のために、しなくてはならないことだと考えていた。

そして、今。

ミシロタウンから二人のポケモントレーナーが旅立つ。

オメガとアルファ。

この二人が、冒険へと、そして大いなる運命へと導かれることになるとは、まだ誰も知らなかった。

終焉と黎明の物語 今後の展開について

今号より連載開始した「終焉と黎明の物語」ですが、次回以降は「紅き終焉」として連載いたします。正確に申し上げますと、こちらで連載するのは「紅き終焉」……即ち、オメガサイドの話となります。

アルファサイドとなる『蒼き黎明』は九月二十三日から「ハーメルン」にて隔週連載を予定しております。なお、十月に投稿を予定しているピクシブ版一巻では、「紅き終焉」と「蒼き黎明」を合体させてご覧いただけるようになります。お楽しみに。

終焉と黎明の物語 1

二〇一四年十月末、投稿予定。

続く第二巻は十一月二十一日投稿予定。以後、月一ペースでの投稿を予定しています。お見逃しなく。

インフィニティ短編『ブラックファスト』

ヴァリエイブル連合王国 サウザンドストリート。

その一角にある、一軒の家。その家はあまりにも広大で、家というよりも豪邸というに等しい。

さて、その一軒の家。

そのキッチン。

ひとりの男が首を傾げていた。

「うーむ、どうしようか」

彼が手に持っているのはツナフレークの入った容器だ。容器と言っても、彼が元々住んでいた世界——日本では缶詰と呼ばれていて、これはこの世界でもそう呼ばれているものだ。

その缶詰を持って、彼は立ち尽くしている。もちろんそれは何か考えているからであって。

「ツナが少しだけ余っているな……。ふーむ、どうしたものか」

これ以上ツナを加えるとどちらにもバランスが悪い。それはこの男、崇人が昔からやってきた黄金比的な何かによって定義されていた。ある程度の量、そのバランスを考える

のが一番難しいのであって、一番大変な作業とも言えるだろう。

さて、それではもうひとりの家主、マーズ・リツペンバーはどうだろうか。

彼女はこの国では『女神』と謳われる程愛されている。その理由を真に知っている人間は恐らく起動従士か、軍の人間くらいしか居ないだろうが。

そんなマーズは今、猫と戯れている。猫の名前はクハージュ。彼女が自分の家の前に捨て置いてあったダンボールから拾ってきた。要するに捨て猫だ。そんな捨て猫は今、クハージュという名前を付けられて、彼女と遊んでいる。

「ツナ、かあ……」

クハージュには専用の食事が用意してある。まあ、もちろん缶詰ではあるのだが、猫の食事を作るよりその方が栄養面等から良いというコルネリアの判断からこういうことになっている。そういうコルネリアは一度来て以来、あまり来ようとはしない。来たがらない、と言ったほうが正しいかもしれない。一度何故なのかと、崇人が訊ねたことがあるが、コルネリアは顔を真っ赤にしただけでそれ以上にも言わなかった。

「まあ……恐らく原因はあいつなんだろうけどな」

そう言いながら、崇人は再び問題と直面する。

ツナフレークの残りをどうするか、ということだ。これをそのままクハージュにあげてもいいのだが、しかしそうなるとクハージュの栄養は大丈夫だろうかという問題に直面する。クハージュはまだ子猫の域を脱していない。だから与えるものにも慎重でなく

てはならない。であるというのに、余ってしまったもつたないからという理由で子猫に与えてしまっても問題ないのだろうか？

それじゃ崇人かマーズのどちらかにそれを追加するか……いやいや、それでは本末転倒だ。バランスが良くないからどうしようかと言っているのに、それではまったく意味がない。

「……ふむ」

結論として。

崇人が導いたのは、こんなことをするまでもない——至極単純な結果だった。

崇人はなにも言わず、スプーン二口分あるツナフレークをそのまま口の中に掻っ込んだ。口の中に油のしみたツナが入っていく。味はあまり付いていないが、とても美味しかった。

そして崇人は空になった容器を証拠隠滅するかのように洗い物の中に投入し、二人分のおかずの皿を持って、

「マーズ、飯だぞ」

と言った。

マーズはそれを聞いて振り返る。笑顔だった。笑いながらマーズはリビングにあるテーブルへと向かい座る。もう食べる準備は出来ており、あとはパンを焼くだけなのだ。

「タカト、今日の朝飯は何かな？ とてもお腹が空いてしまったよ」

「今日はツナサラダだ。ツナをいい感じに載せてみた。それに昨日の特売で安かったし」
「流石。それじゃ、パンを焼くか。それくらいは私もやるよ」

「そう言っつて黒焦げにした。パンを渡したのは、いったい誰だった……？」

崇人はそれを指摘したが、マーズは口笛を吹いて二枚の食パンをポップアップトースターに放りこんだ。

それを見ながら、崇人はマグカップに入った牛乳を一口啜った。

終わり。

私の、たったひとりの友人へ

0. プロローグ

人は死んでしまつたらその姿を電柱に変える。

そんなルールがこの世界の常識となつているのは、私が生まれるはるか昔のことだつた。

とはいえ、電柱というものを実際に有効活用しようなどと考えたのは僅か一世紀に過ぎない。それまでは邪魔者扱いされて、除け者扱いされて、地中深くに埋められたり、どこかに移されたりしていた。

今のこの時代だからこそ、人が死んで電柱になる——ということはまだいいこととなつているが、つい少し前までそんなことが起きていたというのである。

仮にもそれは墓だ。死人を吊う場所だ。そんなことをしてしまえば罰当たり……なんてことを誰も考えなかった。

考えてみて欲しい。電柱により大地が埋め尽くされてしまう光景を。

想像してみてほしい。駅ホームに電柱が屹立する光景を。

そんな有り得ないことではない。これはあくまで、この世界での真実を語っている。

——もし、人が死んで電柱にならなかつたら。

そんなことを考えた学者も多く存在した。ただ、それは夢物語に過ぎない。

そんな話を聞いていた中学校時代の私は「なるほどな」とだけ思っていた。別にこの授業はただの道徳であつて、試験とかにはまったく関係ないことなのだろうけれど、まあ、聞いて損はない話だろう——とは思っていた。

私が死んだとしても、その姿は電柱に変わってしまうのだろうか。そして、それは誰が確認したことなのだろうか。

そんなことを考える以前に、この世界の大前提が覆るわけもなく、私はその考えたことと自分が徒労に感じて、直ぐにその考えを止めた。

——それは、私の中学校の頃のおはなし。

——そして、そんな曖昧な思考のまま、私は大学生に進んだ。

1. イングリツシユガーデンは友人をも生み出す

私の名前は吉川アヤという。大学生だ。近所にある大学で物理学を学んでいる。昨今物理学を学ぶ女性とかが増えてきて、俗にそれを『理系女子』リケジョ』とかいうらしいけれど、そんなのテレビが勝手に決めていくだけのことじゃない、と一喝したもんで、私の周りには私のことをリケジョなどと呼ぶ人はいなかった。

目の前にある黒板には電柱の絵が描かれていて、そこに補足説明として、こう書かれていた。

——電柱は人の最後であるが、それは決して魂の輪廻が打ち切られたわけではない。物理学を学んでいる私にとっては頭が痛い話だ。この授業、『人間と世界』という授業は名前のとおり人間と世界について学ぶ授業であり、今は電柱概論という分野に入っている。

人が死んだら電柱になる。

この世界ではもはや当たり前になってしまった常識だ。この世界で死んだ人間は、例外なく電柱になっていく。だからきっと私も死んだとき、電柱になっていくのだろう。

「電柱に付随している電線は、電柱によって本数が決まっている。その本数が増えることもあれば減ることもある。……吉川、これはどう言う意味か解るか？」

「はいっ。……えーと、魂の輪廻、或いは魂のつながりのためであると考えられていま

す。魂のつながりが多いと、電線も多い……」

「ああ。そうだ。そのとおりだ。よく復習しているな」

その言葉を聞いて、私は安堵する。なにせ、ちよつと前まで読んでいた部分に書かれていたことだ。間違えることはそうない。

そもそも魂の輪廻、魂のつながりという意味を私はよく理解していない。というかここにいるほとんどの学生は理解できていないと思う。だってこの授業はノート持ち込みオツケーの試験だし、ノートに書いたことがそのまんま出るために学生にとつてこの授業は単位が楽にとれるヌルゲーというやつなのだ。

授業が終わって、私は時計を確認しながら講堂を出た。時刻は十二時二十分。ちよつどお昼時だ。

「……今日はいいい天気だなあ」

そう呟いて、私は弁当が入っているカバンを持ち直し、庭園へと向かった。



私の通っている大学にはイングリッシュガーデンというものがある。意味はよく解らないけれど、庭園として開放されているので、そこにあるベンチに座ってご飯を食べたりすることが出来る。

友達がいらない——わけじゃないけれど、このご時世物理を学ぶ女性が増えているから
とはいって、その女性と直ぐに友達になれるわけでもない。

だから私は今日も弁当をこの天気のいいイングリッシュガーデンで食べるのであった。
蓋を開けて、中身をみる。とはいえ私が作った弁当だから別に感動というものはない。
卵焼きに肉団子にポテトサラダ、スパゲッティにブロッコリー。どれも私が好きなもの
ばかりだ。好き嫌いは特にないけれど、こうやって特に好きなものを食べられるのが弁
当の醍醐味だと私は思う。

「ねえ、ここいいかな」

そう言われて、私は顔を上げた。

そこに立っていたのはひとりの少女だった。プリーツスカートを履いて、フリルめい
たものがついたシャツ、それにジャケットを羽織っていた。髪は茶色く染めているのか
或いは地毛なのかは分からないけれど、ともかくとても綺麗な髪だった。

「いいけれど……」

私はその提案に肯定する。

「やった、ありがとね」

そう言って彼女は私の隣に座った。

彼女はカバンに入れていたぶどうパンを頬張る。

「……ところで、どうしてあなたはここにいるの？」

ぶどうパンを頬張りながら、彼女は言った。

「私は、別に。この天気がいいし、眺めもいいから」

「そうねえ。確かにここは眺めもいいし、天気も良ければお弁当でも持ってきて云々、
つて出来るよね」

彼女の言葉に私は頷く。

けっこうおしゃべりなんだな、と私は思った。

「あなた、さっきの『人間と世界』の授業に出ていたよね」

「ええ」

「……人が死んだら電柱になる。ふと考えると面白い話よね。だって私たち人間はるか昔はそんなことなんてなかった……って話も聞くくらいよ」

それは確か人権団体が言っていた戯言のような気がした。

人間には人間らしい死を与えるべきだ、と言ってその論を展開した。

結果として具体的な証拠が出てこなかったためにその論は論破されてしまって、『人間は死んだら電柱になる』という現行のことがそのままになっているのであった。

「でも人間は死んだらそのまま電柱になるわよ。隣のおばさんだって亡くなった時は家の裏に電柱が出来た、って言ってたし」

因みに家など私有地に電柱が出来た場合は、『特定区域外電柱敷設書』を国に提出して、それなりのお金を収めなくてはならない。

しかし『特定区域』というのは、もうこの世界に殆どない。電柱はいつまで経っても残り続けるから、結果としてこのまま行けばこの星を埋め尽くすのではないか——しかしそれははるか未来だと言われている——という論文が発表されているくらいである。「人間が死んだら電柱になる、っていうのなら、それなりの土地をもっと用意すべきだと思っよ」

それは土地が限界だから、用意出来ないのではないだろうか？

——などと、殆ど見ず知らずの人と話をしているうちに、お昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴った。

「あ、もうこんな時間。授業にでなくちゃ」

彼女は立ち上がり、そそくさと去っていく。

「あ」

しかし彼女は何かを思い出したのか、踵を返し、直ぐに私の方へと戻ってきた。

「私の名前、夕月梨沙っていうの。よろしくね！」

そして再び、彼女は走っていった。

私は梨沙を、ただずっとその後ろ姿を、眺めているだけだった。

2. 証明問題と、その解答者

「死んだ人が電柱になるのはどうしてなんだろうか？ 気になったことはないか」
ある日の昼食で、梨沙はそう言った。

私はそんなこと考えたこともなかったので、何も言えなかった。

「死んだ人が電柱になるのは……それはあくまで社会の摂理じゃない？」

「私は死んだ人間を目の前で見たことがないから知らないんだ。だから、どうして人間が死ぬと電柱になると明言出来るのがイマイチピンとこない」

そう言われてみればそうだった。

梨沙の言うとおりに、私も人が死んでいく姿を目の前で見たことがない。

見たことがないから、なんだというのだ——という話になるけれど、ともかく私は目の前で死んだ人間を見たことがない。

だからこそ、考えたことがないのかもしれない。

——死んだ人間が、電柱になる。

その事実には。

「……だから、私はそれを証明したい。けど、目の前に死ぬような人間なんて彷徨いていないのよね」

「じゃあ、どうするの？」

「思ったの。それじゃ、いつそ私が死んでみよう……って」

「は？」

それは予想外の言葉だった。

「でもあなたが死んだら証明なんて出来ないんじゃないか？」

「証明はあなたにして欲しいの。まあ、別にそれができなくてもできなくても世界の理なんか変わるわけがないのだけれど……ね」

「……やだよ」

唐突にそんなことを言われて、「はい」と言えるわけがない。

私のその言葉を聞いて、梨沙は目を細めて、頷く。

「解っているよ、それくらい。そんな唐突に言われたって、決められっこないよね。解ってる」

梨沙は私を抱きしめた。ぎゅっと、その力が強まる。

「でもね、わたしは確かめたいの。きっと昔の人たちもそうしてきたことだろうけれど」

……私は実際にしないと納得できない。なんせそういう性格だから」

「でもそれじゃあなたが解決したってことには」

「だったら化けてでも出て、真実を知るよ」

「化けてでも、って……面白い話をするわね、あなた」

「なによ。冗談のつもりで言ったわけではないのに」

冗談じゃない——梨沙はそう言ったけれど、私はそれが冗談には感じ取れなかった。
まさか彼女は本当に——

「ねえ、あなた本当に消えないでしょうね？」

それを聞いて、梨沙は微笑んだ。

「さあ、どうでしょうね？」

私はそれ以上、そのことに言及することは、どうしてか出来なかった。

3. 答え合わせといきましょ

次の日。いつものように梨沙と食事をする事が出来て、なぜか私は安堵していた。どうしてかは解らない。彼女と昼食を一緒に取り始めたのはつい最近のことで、そこまですぐ仲がいいというわけでもないのに。

「今日もいい天気ね」

梨沙がそういうのを、私は横目で見ただけだった。それと同時に何も変わっていない梨沙にほっと一息溜息を吐くだけであった。

「……ねえ、アヤ」

「うん？」

珍しく梨沙が私の名前を呼んだ。

「私がおし、本当に死んでしまったとしたら……どうする？」

「どうする、ってそんなこと証拠もないでしょ。まずは探してみないと」

「みつからなかったら？」

「それは死んでないと同義だよ。というか、目の前にいるじゃない」

「これが今、幽霊であるとすれば？」

「……解らないね。幽霊であってもそうでなくても、私はあなたの痕跡を探すと思う」

「どうして？」

梨沙が私に訊ねる。私は微笑んで、話を続ける。

「だってあなたは私に約束したじゃない。『死んだ人間が電柱になる』、その証明がしたい……って」

それを聞いて、梨沙は頷く。

「覚えていたんだね」

「覚えるものにも、それはつい最近……いや、昨日の話だよ。昨日のことを忘れるなんて相当幼稚な頭脳を持っているに違いないね」

私の言葉を聞いて、梨沙はさらに頷く。

「やっぱり君に話してよかった。ほかの人だったら気違い扱いされていただろうからね」
「でも、私は少しはそう思っているよ？ パーセンテージにして……二十パーセントくらい」

「傑作だ。それくらいの気持ちでいなくてはね」

そう言つて梨沙は歩き出した。

「どこへ？」

「決まっているだろ。私が死んだ場所だ」

——やっぱり、ホントに死んだのか。

私はそう思つて、唾を飲み込んだ。ほんとはいろいろと聞きたいこともあつたけれど、今ここという事でもないだろう。

そして、私は。

彼女の言葉に是と答えるように、彼女の後を追った。
大学のことは、あとで考えることにしよう。

4. 長い長い旅の始まり

大学を出るとビル街が広がっていた。

ここは都会のど真ん中——とは言わないが、少しばかり栄えている場所にある。歩いて、歩いて、私たちは駅に到着した。

「あんまり話しかけないほうがいいよ」

ずっと私は梨沙と会話していたのだけれど、梨沙が溜息をついて話しかけた。

「どうして？」

「どうして、って。あんた周りを見てみなよ。変わり者と思われているよ」

周りを見れば、私を横目で見る人や笑っている人、中には堂々と携帯電話で写真を撮っている人もいた。

「それがどうしたっていうの？ あなたはここにいるじゃない」

「……君にはかなわないな。まあ、いい。まずは電車に乗るとしよう。ああ、一応忠告しておくけど一人分で充分だからな。間違つて二人分も買ってお金を無駄にしないように」

「解っているよ」

そう言つて私は、切符を買いに売り場へと出かけた。



梨沙から買うように命じられた切符の値段はそれなりに高いもので、結局券売機では買えないものだった。窓口で言わないと買えない値段だった。窓口のおじさんが「へえ、こんな物珍しいところまで行くのかい」とだけ言った。不審に思われたのかどうかは、解らない。

「ところで、こんなに高い切符……どこまで行くつもりなの？」

私は電話をかけている『ふりをして』、彼女に声をかけた。

ちなみに、なぜこうしているのかというと、彼女がこうしていれば不審に見られない——という優しきみたいなものからきているのだが、私としては別にどっちでもいいのだ。

「ちよつと遠くにある田舎町だ。場所は私が教えるから、安心していい」

それを聞いて少しだけほっとしたのと、私は決心しなくてはならないのだという恐怖に襲われた。

このままいけば、私は彼女の死体、或いは彼女の死んだ証である『電柱』を目の当たりにすることになる。

それを見て私は正常でいられるのか。気を狂わせずにいられるのか。

それが疑問でしようがなかった。

「まあ、それはおいおい考えればいいか……」

その呟きには、敢えてなのか偶然なのか、梨沙は反応しなかった。

5. レゾンデートル

何個か電車を乗り換えて、単線をディーゼル車が走った、その終点に私たちはいた。駅、とはいっても折り返しのあれもなく、ひとつの楕形ホームで構成されているだけだった。

窓口にいる駅員さんに切符を渡し、私は漸く外に出ることが出来た。

「やっとなついたね」

梨沙が私に声をかける。

「ほんとだよ、どれくらいかかったかな」

私は時計を見た。今は夕方四時を回ったくらいだった。実に二時間以上電車に乗っていることになる。

でも二時間——でこんなところまで来れるというのだから、まだまだ田舎というのは都会のそばにあるのだということを実感させる。

でも、こんな場所でも電柱はある。そしてそれはずっと繋がっている。

「そういえば、ある科学者が電柱に通信できる可能性を見出したのはどれくらい前の話だったかな」

電柱を見つめながら、梨沙は言った。

「脳の細胞にあるシナプスがどう動くをしているのかははっきりしていないが、神

「経伝達物質が細胞間に放出されて、それを受容することで情報の伝達が可能となる……
どうして死んでもその役割が可能となっているのかは解らないが」

「確かイオン電流を流したんじゃないっけ？　そういうことでシグナル伝達が行われることが発見されていて、それを応用したとか」

「それだ」

梨沙は私を指差して、答えた。

「電気シナプス。それを使って、電柱間で通信をしているんだ。だからこれは誰かの墓であると同時に、全国各地に通信を行き渡らせるネットワークの中継点でもあるわけだ」
「でも、それ以外にもあるでしょう？」

そう言っただけで私は上空を指差した。

電柱には、鳥が止まっていた。

「ここは鳥のオアシスにもなっているみたいよ」

「……そのようだな」

そう言っただけで、梨沙は笑った。

6. 自動販売機での一幕

暫く歩いていくと、目の前に自動販売機があった。

「……暑い」

「飲めばいいじゃない」

「幽霊つて暑さを感じなかったりするの？」

「うーん、どうだろう。詳しくは解らないかなあ」

梨沙は呟く。

私は喉がカラカラで死にそうだったので、硬貨を入れて何を買おうか商品を見ていた。……と、思っていたのだが、いつまで経ってもランプが点灯しない。とはいえ『売り切れ』のランプも点いていない。

「……どういうこと？」

「ちゃんと飲み物代、全部入れた？ 十円くらい値上げをした、つてこと覚えてる？」
「覚えてるよそれくらい……」

そう言ったところで、私の思考が停止した。その理由は、今いくら入っているかを知らせる画面を見ていたからだ。

入れた金額は百五十円。それに対して、ペットボトルのお茶は百六十円。

——即ち、梨沙の言い分が正しかったことを意味していた。

私は静かに財布を開け、十円追加して、お茶を購入した。梨沙は笑いを堪えていたが、それを見ないようにして。ペットボトルの蓋を開けて、一気にお茶を流し込む。その表情は周りに見せたらとてもじゃないが恥ずかしくて穴があったら入りたいくらいのものになるだろうが、周りには梨沙しかいないからそんなことはどうだってよかった。

半分近くお茶を消費するほど、私は飲んでしまっていた。
ふう、と一息ついて、ふと梨沙の方を眺めるとじつとこつちを見つめていた。

「お茶、呑む？」

「いいや、死んでしまってからこの身体が随分と楽になってね。食欲も睡眠欲も性欲も感じない。便利な身体だよ」

「性欲を付け足した理由はあったの……？」

「いいや、特にない」

そう言って梨沙は微笑んだ。

私は自動販売機で一応、もう一本お茶を購入しておいた。理由は簡単、この先自動販売機やお水売っているお店があるかどうか曖昧だったからだ。ここは来たことのない場所だから、それぐらいの警戒はしておかなくてはならない。

空を見ると、少しだけ曇ってきていた。

「今日は雨の予報だった気がするね」

梨沙は言った。

「幽霊なのに天気予報なんてわかるの？」

「さっきのシナプスの原理で解るんじゃないかな」

そんな曖昧な答えを、私は信じることしか出来なかった。

7. 私の、たったひとりの友人へ

山奥にある小さな集落。

さらにその奥に進んだ小さな井戸のそばに、それは立っていた。

その周りは古びた建物ばかりが並んでいたというのに、そこだけ異世界のように感じられた。

真新しい電柱が、そこには立っていた。

それを見て私は少しばかり驚愕した。心を打ちのめされた。目の前に彼女はいるのに、しかしその目の前には屹立するように彼女の墓があった。

「ほら、名前もあるよ」

そう言つて、梨沙は看板を指差した。

——夕月梨沙、ここに眠る

誰が書いたかも解らないそれを見て、私は漸く彼女が死んでしまったことを理解した。いや、理解せざるを得なかった。こうまじまじと物的証拠を見せつけられたのだ。信じざるを得ない。

「……ねえ、そういえばさ」

私はここで、ずっと気になっていたことを、彼女に問いかけた。

「何？」

彼女は首を傾げる。

私はそれを見て、本当にそれを質問していいのか解らなかった。ただ、私は。

意を決して、それを訊ねた。

「——あなたは、どうして私をここまで連れてきてくれたの？」

その問いを聞いて、梨沙は目を細めた。

梨沙は、頷いて答える。

「いつかはその質問が来ると、いつかはそれに近い質問が来ると思っていた。けれど、

私はそれに対する適解をいつも求められずにいた。……だが、今なら言えるよ」

一息。息を吸って、吐いて、梨沙は答えた。

「私は——君のことが好きだ」



私が初めて君のこを見つけたのは、講義でのことだ。前の方に座っていた君は優秀だったし、何しろ見た目が可愛かった。私はそれを見て、一目で恋をした。そして、思った。ああ、恋に落ちる瞬間とは——こういうことを指すのだな、と。

私は君の名前を調べた。ああ、いい名前だと思つたよ。そして君はいつもイングリッ

シュガーデンで昼食をとっていることを知って、私は直ぐにそこへ向かった。

そして、そこに君がいた。

小さい弁当箱の中身を、キラキラと輝いた目で見つめる君の姿を見つけたんだ。

私はそれを見て、思わず飛び上がりそうになった。でも、それを必死に押さえ込んだ。

「ねえ、ここいいかな」

—— 思えば、それが君と私が初めて顔を合わせた瞬間だった。

私は考えた。

どうすれば君に覚えていてもらえるだろうか、ということに。

そこで私はひとつの結論を導き出した。

そのための、準備を始めることにした。

一つ、君に『死んだら電柱になる事への疑問』をぶつける。

一つ、その証明がしたいと言って私が死ぬことを仄めかす。

この二つだ。

この二つが何を意味しているのか、もしかしたら君には到底理解出来ないかもしれない。
い。

でも、私は一生懸命、あなたに覚えてもらいたくて、あなたから私の記憶が忘れない

ように、この選択にしたんだ。



「……狂ってる」

私の、それを聞いた第一の感想がそれだった。

つまり彼女——梨沙は私のために死んだ、といっても過言ではない。私に覚えてもらいたくて、死んだというのか。

「そうよ、あなたに覚えてもらいたくて、私の電柱を見せて、私の死を見せつけることにしたの」

「……おかしい。そんなことはおかしい。第一、そんなことで私が覚えられると思ってるの？ 確かに死んだ人間はその生き残っている人たちの心に深く何かを刻み付けると思うけれど、それも何れ忘れ去られるのよ？ 彼らがいっまでもあなたが死んだことに苦しみ、悲しむことなんてないのよ？」

「それでもいい。一瞬でも、数瞬でも、あなたの心に『夕月梨沙』という存在を刻みつけていてくれれば」

梨沙は電柱を撫でる。

しかし透けてしまった身体では、実体に触れることはかなわない。

「あなたは……これを愚かなことだと思う？　これを意味のない行動だと思う？　これが……無駄な行動であると思う？」

「……私は」

そう思う、とは言えなかった。

彼女のためだったのかもしれない。

それ以上に、私のためだったのかもしれない。

どちらにしろ、私はそれを肯定することも否定することも出来なかった。

経験したことのない人間が、そんなことを語るなんて仰々しいことだし、大それたことだと思う。それでも彼女は。私に訊ねた。私にそれを訊ねたのだ。実際にした人間でなくても解らないその回答を、私に求めたのだ。

「……ねえ、答えてよ」

梨沙は私の肩に触れた——否、彼女の触れた感覚は、私には感じられなかった。

彼女は涙を流して、さらに話を続ける。

「私は君のことが好きだったんだ。愛しているんだ。だけど、だけどき、そういうのってダメだって……みんなが言うんだ。誰もが言うんだ。だけどね、私は諦めたくなかった。あなたという存在を、私は諦めたくなかったんだ。そして私はあなたのことを、永遠に見守っていかうと思った。そしてあなたに私のことを、永遠に忘れさせないようにしようとした。それがこのひとつの解だよ」

「この解が、正しいかい？」

「そう思うよ」

「いいや、それは誤解だ。誤っている解だ。間違っている解だ。それ以上に、あなたは間違っている。どうしてそんな選択をしたの？ あなたは——」

——どうしてそんな愚かなことをしてしまったの？

言ってしまった。

私はその気分に任せて、言っではいけないことを、口にしてしまったのだ。

それを言っ、口を塞いだ——時すでに遅かった。それは彼女に聞かれていた。彼女に届いていた。

彼女は微笑む。

「そうよね……。私は間違っていた。……けれど、それが正しいと思っていた。それが間違っているはずないことだと思っていた。それが正しい答えだと思っていた。だけど、あなたはそれを認めてくれなかった。そうよ、普通ならこんな方法認めてくれるはず……ないものね」

「そう、だけど……さ」

私は彼女を抱きしめた。

すけてしまつて、実際にその感覚こそつかめないけれど、私はほんの僅か彼女の暖かさを感じた。

「私は初めて梨沙に会ったとき……嬉しかったんだよ。友達が出来て、いつも楽しく話すことのできる友達が、これほどまでにいいことなんだ……ってことに気付けてさ」

「……………でも、私はあなたを裏切った」

「裏切ってなんて、いないよ。あなたは何を裏切ったの？ 解らないのだから、それは『裏切り』なんて言わないよ」

私は思いの丈をぶちまける。

もう、思い残すことを無くすように。

「私はあなたと出逢って、いろんなことを話したしいろんなことを知った。それってとても素晴らしいことだと思っただけだよ。大学生活はとても長かったし、とても楽しいものになる。その第一歩となったのが、あなたと友達になったことなの」

梨沙は、ただ泣くばかりでうんうんと頷くだけだった。

私はさらに話を続ける。

「ねえ」

私は優しく微笑んだ。

「これからも——私のそばに居てくれる？」

それは、私のたったひとりへの友人へ向けた、告白だった。

8. エピローグ

夏は暑い。

とても暑い。

私はいつものようにイングリッシュガーデンで食事をとっていた。結局『彼女』以外の友人など出来なかった。いや、作るつもりも毛頭なかった。

だって、彼女はいつも私の隣にいるのだから。

「今日は野菜が少ないんじゃないの？ ちよつとは野菜を食べなさいよ」

隣に座る彼女——梨沙は言った。

梨沙は私のプロポーズめいた告白に了承してくれた。そのあと、ずっと私のそばにいてくれて、いろんなことを言ってくれる。たまに小言が始まることもあるけれど、それでも私の大切な人だ。

「うるさいよ、これでも野菜はいっぱい入ってるの。ほら、見てみなよ。アスパラのベークン巻き、これはアスパラが入っているでしょう？ それに、レンコンのはさみ揚げ。

これもれんこんが入っている。そして豆腐ハンバーグはグリーンピースとか人参とかがゴロゴロと……」

「あー、もういい。解ったよ。野菜がいっぱい入っているね。それでいいかい？」
「構わないよ」

そう言つて私は微笑んだ。

そんな時だった。

「ねえ」

私に声をかける、ひとりの女性がいた。それはいつも同じ授業を受けている人だった。顔を見たことはあるが、面識はなかった。

「すごく楽しそうにおしゃべりしているね。ボクも混ぜてもらつていいかな？」

ボーイッシュな女性だった。

私はそれに断ることなど、なかった。

——私の知らないところでの話しになるけれど、私は『幽霊と話す女性』だの『見えな
い恋人と話す女性』だの噂が立っていたらしく、大学では有名になっていたらしかった。
まあ、それはすべて真実なのだけだ。

その後、私とそのボーイッシュな女性は、ある程度仲良くなった——いわゆる『友人』
になった、というのは、また別の話。やっぱり、イングリッシュガーデンは友人をも作
り出すらしい。私はそう思うのだった。

パラボックスよ、こんには。

中枢都市エルダリア。

完全無欠で質実剛健で文武両道な人間が暮らす、一から十まで完璧な街。

街中は『キャビネット』と呼ばれるモノレールが至るところに網の目状に通っており、人々はそんなものを見つめて、いる。

街中を歩く——白衣の少女はラジオに接続したヘッドフォンを装備していた。耳に通るのは、午後のニュースである。

ニュースとはいえ、しらされる情報は所詮、政府の目を通した『限られた』情報にしかな過ぎない。

西暦二〇一七年、その日は訪れた。

妖——異能の力と、科学との対決。

後にこれが『第三次世界大戦』と呼ばれ、世界を二分した。

科学勢力で、異能を圧倒していたのだが、二〇一八年春、事態は一変する。

『第二のソドム・ゴモラ』と呼ばれるその事象は、今でも多くの人間の目に焼きついている。

今まで中立を保っていた日本政府が正式に異能の排除及び日本国の『神憑き』を妖と

戦わせる——そう判断した。それによって、世界のパワーバランスは大きく変化した。神憑き——名前通り、神の力を憑かせる存在——は、三日で妖の勢力の総本山『妖都』を破壊した。業火に焼かれ、雷に打たれ、豪雨に流され——残った妖も妖に食われ——その残った妖も科学の力には適わず——わずか三日で滅ぼされてしまったのだ。かくして、世界は平穏を手にした——はずだった。

彼らの戦いは、ほんの序章に過ぎなかつた。

妖側の勢力に立っていた新興宗教『新世界』が、ある装置を起動した。

それは、人々に元からある『原罪』を洗い流すため。

それは、この醜くも残酷な争いを止めるため。

その装置が起動したあとは、世界は大波に流された。『ノアの方舟』の再来だった。残された人類はあれやこれやと高台へと逃げる。しかし、そんな高台をも水は飲み込み、もがき苦しみ——死んでいく。

しかし、そんな人間はそれを予知していたのかは知らないが、空中都市を造り上げていた。

高さ千メートルの位置に、半径三十キロの巨大空中都市。

これが、中枢都市エルダリアの姿である。

そして、エルダリアの中心地にあるエルダリア大学へと彼女は入っていく。近くのコンビニで買ってきた紙パックのミルクティーを持ちながら。

不機嫌そうな目をして、大学の通路をひたすら歩く。

暫く歩いていたら、何もプレートに書かれていない部屋の前について、立ち止まる。鍵を探すためにポケットをまさぐっていたが、

「開いているよ」

その声を聞いて——何も言わず、彼女は扉を開けた。

そこに居たのは、黒い散切り頭の男だった。

髭を無造作に生やしていて、手入れもあまりしていないことが見て取れる。

散切り頭の男は彼女が入ってくるのを見て恭しく微笑む。しかし、彼女はそれを無視する。

研究室とはいえ、こじんまりとしたものだった。机の上にパソコンが二台、サーバーが一台、棚が一つに冷蔵庫、それにキッチンとベッドがあり、ここで生きていける感じになっている。

「やー、君が悪いんだぜ？ 鍵を閉めないんだから。もし僕じゃなかったらどうするつもりだったんだ？」

「私は鍵を閉めたつもりだったんだがな。どうして、ここの鍵を手に入れた。手段によつては私は教授にお前を突き出すぞ」

「君がデートを断るのが悪いんじゃないか」

「鉄道に私は興味がないんだ。こんなクソ狭い都市を急いでどこへ行くというんだよ」

「一秒一分……そんな『僅か』な時間でも、やはり一刻を争う事態というくらいだからね」

「それで貴様は何でここに来たんだけ？」

「だから、デートだって言っただろ？」

「私とどうして関わる？」

「君と関わりたいからさ」

ああ、もうこの男と話しても埒が明かない——彼女はそのことを知っているくせに彼女は、男と話している。それを考えると結局彼女は男のペースに乗っているということなのだろう。

次号予告

「RISING mini」第7号
九月二十日刊行予定！

【連載陣】

「オリジナル」

「ロジカリスト(猫)」

「俺の同級生が魔王」

「インフィニティ短編」

「パラドックスよ、こんにちは。」

「odd」

「二次創作」

「ネクストワールド 名のなき世界3」

「黒板厨ゆうなマガカ…結 夏」

「終焉と黎明の物語」

「Pokémon XY」

Etc...

の豪華？ラインナップでお届けします。しばらくお待ちください！

あとがき

一年ぶりとなります。第六号です。不定期刊行、とは銘打っていましたがここまで来ると少々酷いものを感じます。

というわけで新しいラインナップになって、第六号およそ一年ぶりの刊行となります。今後は隔週刊行を目指していく所存です。

また、今号より「インフィニティ 二周年プロジェクト」と銘打ち様々な企画を行っていきます。その第一弾として、短編「ブレックファスト」を掲載いたしました。新規書き下ろしの短編となっており、現時点で見ることが出来るのはここだけになっております。是非、楽しんでいただければ幸いです。

短編掲載は暫く続けていく方向ですので、第七号をお楽しみに。九月末頃、刊行を予定しています。

それでは。